

ビバハウス便り NO.100 これからも、ただひたむきに歩み続ける

2014年9月10日 ビバハウス 責任者 安達 俊子

この9月1日は、ビバハウスの満14歳のお誕生日であった。夫の突然の胆のう炎による緊急入院や、穴埋めのためのどたばたで、全く意識もしていなかったが、例年のように、この日につくば市のお母さんからのお祝いの品々が届き、改めて14周年の創設記念日を実感した。

14年前の6月ごろ、小樽市に住んでいた北星余市高の卒業生のSさんからの、「俊子先生助けて！」のひと声が、私たちの生き方を変えてしまった。あの年の9月1日、全生活を若者たちとともに生きるビバハウスをスタートさせ、気がついたら私は72歳、夫は「俺は後期高齢者だ」と自慢している75歳になっていた。当時は正直な気持ち、なんとかこのSさんを独り立ちさせるまでの間は、責任を持たなければとの思いでのスタートであったが、まさか14年も引き続き、さらにこれからも勝手に辞められない現実に直面している。

今日9月10日現在の在籍者は、男性10名、女性2名、14歳の町内中学2年生（サッカーの選手として全道大会に出場した）から、34歳の大学卒業生（男性）までに及んでいる。実は元陸上自衛官、長距離トラック運転手だった48歳の最高齢者がつい最近まで約4年間滞在していたが、家族からこれ以上経済的負担が出来ないと迫られ、仕事を探し働くこと約束したが、翌朝失踪し現在どこにいるかは不明である。

最近の特徴は、メンバーの約3分の2以上がアルバイトなどに付き、生活面では全員が規律どりの生活が出来て、メンバー同士の思いやりが芽生え、毎週金曜日のホームルームでも、しっかりと自分の考えを発言出来るようになってきている。ビバでの生活が、これまでと違って、国の支援事業（若者自立塾、基金訓練、求職者支援制度）との2本立てを打ち切って、本来の登町での生活に一本化したため、指導体制も改善され（5月よりは27歳の優秀な新人を採用する事もできた）全般的に余裕のある毎日になっているせいもあると思われる。

しかし同時にこの間、若い前途ある複数のビバ卒業生を自死により失った痛恨事もある。関西からの若者は数回にわたり毎回2,3日ずつビバ生活を繰り返していたが、自宅に帰り家族が全員で外出中に、みずからの命を絶ってしまった。また北星余市高卒業生のビバでボランティア委員会の結成を呼びかけ、自ら委員長を担ってくれた若者は、目指した仕事への挫折からか、車ごと海に飛び込んでしまった。この痛みを絶対に忘れる事はできない。

北星学園大学の木下武徳教授のお招きで、9月27日（土）北星学園大学で行われる「北海道地域福祉学会第2回定例研究会」での講師を依頼された。「若者自立支援と生活困窮者支援の連携の可能性～ビバハウスの実践から～」という難しいテーマを頂いたが、久しぶりに母校を訪れる喜びも頂いた。

